

10. コロナ明けで取り戻した日常とその効果

介護老人保健施設 大阪緑ヶ丘
介護職員 竹林鈴代（たけばやし すずよ）
共同発表者 横山博隆 辻野真理

2020年新型コロナウイルス感染症「以下、COVID-19」・パンデミックとなり、さまざまな感染予防対策、三密回避、マスク着用、手袋やガウン着用、消毒やシールド設置、などを講じ、それでも感染拡大が防げなかった。2022年及び2023年7月に当施設でもクラスターを経験した。

今回のクラスターで経験したことは、隔離を行う事で入所者 ADL や認知機能の低下が顕著にみられたことである。

リハビリテーションを中心に日常生活を営むこと、更には行事を行うことで入所者の ADL の維持や認知症の進行予防につながる事を経験した。

症例 1) 84 歳、介護 3。COVID-19 感染後食事摂取量が減少。活気の低下が見られた。栄養士及び言語聴覚士で嚥下状態が問題ないことを確認した上で、パンの訪問販売を利用。自身で選んで頂き食べて頂くなど、自分の好みに沿って選んで頂き行動するような働きかけを行った。それにより自らリハビリやレクリエーションにも参加し、結果として食事量も増え ADL のアップにつながった。

症例 2) 認知症ケア棟入所中の方。クラスターを機に帰宅願望がより強くなり、施設玄関と居室棟を往復するようになった。COVID-19 感染後、速やかに家族との面会を再開し、作業療法士の働きかけで好きな音楽を取り入れ、施設外への車いす散歩も積極的に取り入れた。その結果、帰宅願望も落ち着き、笑顔が増えた。

結果) 感染対策を行ったうえで、行事やレクリエーションを再開し、ボランティア講師で書道や作品作り、3 年間開催できなかった夏まつりを復活した。お祭りでは、入所者及び職員も浴衣に着かえて、たくさんの模擬店を出しお祭りの雰囲気づくりをした。利用者の感動を呼び起こす様々な仕掛けを工夫した。お祭りでは利用者の明るい笑顔にあふれ、ほんの少しの工夫が利用者の認知症の進行の予防や ADL 低下の予防になることを再認識した。これからの日常生活の中で様々な工夫を取り入れていく必要があると考えられた。

COVID-19 感染症で経験したことを糧として、今後は気持ちを動かし、体を動かすきっかけになるように、日常生活とさまざまな行事を復活させていきたい。